

20036

A case of stenting through stent strut, and experiments to compare each stents.

¹名古屋徳洲会総合病院

田中 昭光¹、中村 真幸¹、大竹 弘隆¹、吉岡 真吾¹、下郷 卓史¹、安藤 みゆき¹、青山 英和¹、加藤 千雄¹、亀谷 良介¹

症例：78 歳男性。弓部嚢状瘤のため TEVAR 施行。TEVAR 後に右外腸骨動脈に解離が発生したためステントを留置。しかし、剥がれた内膜がステントの proximal edge を塞ぐ形になっていたため、もう 1 本 proximal にステントを追加留置した。ここでじつは wire が 1 つめに入っていたステントの strut を縫っており、strut 越しにステントが留置されてしまった。IVUS で 2 本目のステントの拡がりが不十分であることが著明。ここでバルーンで拡張したところ、IVUS でもステントの良好な拡がりが確認できたため手技終了した。この症例を通して、末梢ステントの strut を十分に拡げるために必要なバルーンサイズ・拡張気圧を各ステントごとに実験し、比較検討してみた。各ステントごとに必要なバルーン径が違うこと edge と mid の strut でも違うことがわかった。結語：ステント治療をするうえでその strut を拡げる必要がある場合が時に存在する。各ステントの構造を理解し、strut を拡げるための至適なバルーンサイズや拡張気圧を知っておくことは有用である。

